〔改訂版〕ＩＣＴ教育推進ガイドライン

令和６年３月に、「ＩＣＴ教育推進ガイドライン」を改訂しました。ガイドラインにも示したように、児童生徒が主体的にＩＣＴを活用し、未来を見据え、創造する力を身に付けるためには、指導者である教員自身が、最新の情報や技術に対応した指導方法の研鑽を積み重ねることが不可欠です。

教員のＩＣＴ活用スキルチェック

令和６年５月の到達度（平均 3.5 以上の教員割合）は、小学校 81.8%中学校 76.4%であり、目標値（100%）は達成できていないものの、「できない」と回答した人数は減少するとともに平均３以上の教員割合は増加しており、各種研修の実施や日常的な活用等の取組による成果が現れています。

次回は、令和６年 11 月に、ガイドライン改訂版に基づき、調査を実施します。新たな項目である「ＡＩ」や「教育データ」といったデジタル技術の利活用は、教育の未来を大きく変革させ、全ての児童生徒が個々の能力を最大限に発揮できる、より質の高い教育の実現を可能にすると言われています。そのためには、ＡＩや教育データの適切な活用について、教員研修を継続していく必要があります。

ＧＩＧＡ 第２期 に向けて

社会全体を見ても、デジタル化、オンライン化、ＤＸ加速の必要性が高まっており、急激な時代の変化を感じます。愛媛県内でも１人１台端末の活用が進む中、令和７年度には、「ＧＩＧＡ第２期」を見据えた端末の更新を迎えます。ＩＣＴは、教員と児童生徒の具体的関係の中で、教育効果を考え活用することが重要です。ＩＣＴを活用すること自体を目的化してはいけません。

ＩＣＴは文房具

ＩＣＴの効果的な活用を研究テーマとした授業を見ると、子供が一斉に１人１台端末を開く場面が少なくなってきています。ノートに向かう子供、端末に向かう子供、教員や友達と対話をする子供がおり、アナログとデジタルの世界を行き来しています。個々に合った学び方で、「知りたい！できるようになりたい！」という主体的な学びの一助にＩＣＴが活用されています。

特性に応じたきめ細かな対応

便利で多様なアプリの活用で、個々の特性に合った学びが進んでいます。例えば、非漢字圏から来た児童生徒や学習の中で漢字の認識に困難を感じている児童生徒は、教科書や資料を読むことに時間を要するため、ルビの有無が学びを大きく左右することになります。そこで、デジタル上で配付されたプリントの文字をコピー＆ペーストすると瞬時にルビが振られる無料のＷｅｂページを活用することも一つの手立てとして考えられます。

１人１台端末は学びのスタイルを変えていきます。学習の基盤となる資質・能力の一つである「情報活用能力」を、子供たちも教員も身に付け、ＩＣＴを効果的に活用した授業にしていきたいですね。